

## この事例集について

本書は、JF 講座で行われている「JF スタンダード準拠日本語講座」での実践を事例集としてまとめたものです。

執筆者は、海外 31 拠点のうち 12 拠点で実際に日本語を教えている現地のネイティブ／ノンネイティブの日本語教師 15 名です。この 15 名は、2012 年から 2014 年にかけて、それぞれの現場で実践を重ね、そのなかで出てきた課題や問題点を、年 1 回、2 週間余りの訪日研修で他の海外拠点の教師と共有し、解決方法を議論し、そこで得られた解決案を、帰国後、次の実践に繋げ、また新たな課題や問題点に立ち向かう、その過程をレポートとしてまとめました。本書に収められている事例の一つ一つは、JF スタンダードに準拠した日本語授業をどう行なえばいいかを考えるときに参考にしてほしいサンプルです。

JF スタンダード準拠日本語講座では、実施コースの学習目標を JF スタンダードに基づく Can-do 記述で設定し、その目標が達成できたかどうかを評価するコース設計を採用しています。コースブックとして使用されている『まるごと 日本のことばと文化』(以下、『まるごと』と略す)は、視聴覚素材(音声ファイルや写真、イラストなど)が豊富にあり、学習者が場面や文脈から主体的に意味機能を推測することを奨励し、言語形式(語彙・文法)を説明に頼りすぎることなく、自らの気づきを通して習得を進める学び方を提案しています。教科書の中に取り上げられている話題や場面、Can-do は、日本語の実際の使用に繋がるもので、日本語だけではなく日本文化や日本人の生活習慣、日本社会の多様な側面を知り理解できるように工夫されています。練習や教室活動は、その中に書かれている指示に従って進めていけば使えるように作られていますが、現場の状況(学習者の目的や学習観、学習スタイル、学習環境、さらには教師の教授観や教育ストラテジーなど)に応じて練習や教室活動の進め方を工夫する必要があります。紹介されている事例は、JF スタンダードの考え方、『まるごと』の基本的な教え方を踏まえた上で、現場で直面する課題をどう解決していったか、現場の教師たちの日々の試行錯誤と挑戦の記録となっています。

事例は、内容的に 4 つのカテゴリー、「コースの設計」、「授業の工夫」、「文化理解のための活動」、「ポートフォリオの活用」に分けられています。

「コースの設計」では、各国の学習者の特性やおかれている環境を踏まえて、コースをどのように設計していったかが報告されています。『まるごと』を使ったコースと他の市販教材を使った中級レベルのコースの設計プロセスが詳細に述べられています。

「授業の工夫」では、実際に『まるごと』を使った授業の工夫が紹介されています。『まるごと』での学習を確実にするための場作り、補助教材や教師用資料の作成、継続学習を視野に入れた補助コースでの授業などが、現場の状況に合わせてどのように工夫されてい

るか、さらに『まるごと』の教え方と現場の学習者、教師のビリーフとの相克をどう乗り越えたかなどがわかります。

「文化理解のための活動」では、現地にいる日本人や日本のモノを生かしてどのような文化体験の場を学習者に提供できるか、日本と現地の相互文化理解につながる交流活動をどのように企画・準備できるかのヒントになる事例が紹介されています。海外で日本文化に触れたり日本語を使ったりする生の体験の場を作ることは容易ではありませんが、ここに紹介された事例は、そのプロセスを考えるための参考になるとおもわれます。

「ポートフォリオの活用」では、ポートフォリオを評価にどのように活用したかという事例と、ポートフォリオの中に入れられた異文化体験記録シートの記述から学習者が異文化をどのように捉えたかという事例が紹介されています。JF スタンドールの基本理念である相互理解を進めるために、「異文化理解能力」育成は欠かすことができません。ポートフォリオで学習者の異文化理解がどのように実現されるかについて議論が深められればと思います。

なお、巻末に資料として 31 拠点の JF スタンドール準拠日本語講座のコース一覧を載せています。2014 年度、各講座でどのような日本語教育が行われているのか、概要を見ていただければと思います。

海外拠点の JF 講座での“新たな”実践を、より多くの日本語教育関係者のみなさんに、具体的に知っていただくために、この事例集は作成されました。「相互理解のための日本語」教育がどのように実現されていくのか、その多様な在り様を共有し、さらにその方向性、内容、方法について議論を深める土台を構築するための事例を提示することができたのではないかと思います。そして、事例を共有することで、さまざまな現場で遭遇する課題に対する解決策のヒントを得ることができ、日本語学習および教授上の無用な停滞を避けることができると考えています。

JF 講座の挑戦は今後も続いていきます。次年度も海外のさまざまな国や地域の現場で新たに展開された取り組みを実践事例として報告していきたいと考えております。この事例集がこれからの日本語教育を議論する際の出発点となれば、これ以上の喜びはありません。